

あるとき、またつるし上げが行われ、先生方がみなに文句を言われているので、私はこれはちっと違っていないか、先日、小林さんの胃けいれんの時も、太田先生は一番先に見つけて治療してくださいました。先生方はみな私たちのために誠心誠意尽くしてくれているのではないのでしょうか、先生方も文句を言われるというのは、表現のしかたが悪いところがあるのではないのでしょうか。ご注意くださいと言ったところ、納得してくれて終わりました。

太田先生は大変喜んでくれて、食事の配分係をやってくださいと頼まれた。ロシア側へ言って置くからということ。その当時、前に憲兵をやっていた人とか、共産党の運動に消極的な人とか、元将校とかで、反動と云ってはねのけになっている人が七人おって、いつも大声で怒鳴られて、いつもキツイ仕事ばかり押し付けられている。反動の人々を太田先生は哀れんでおられたので、反動の人にもよろしくと頼まれたので、私は食事を分配して、少し残して、反動の人々にバックンを洗うように言っています、残りの食事を食するようにしたが、みなが何か悪い

ことをしているのではないかと探り出そうとするし、これはうかうかしたらまたつるし上げされるのではないかと覚悟をしたが、ちょうど日本に帰る人名の発表があった、私の名も入っていたので、やれやれ助かったと思っ

た。
反動の人も太田先生も喜んでくれて、三日してナホトカ港に向かって汽車に乗り、ナホトカにて日本の明優丸に乗って舞鶴に向かった。昭和二十三年六月末だった。

ソ連での生活

和歌山県 楠山 良治

ご詠歌に人生わずか五十年と歌われている。終戦になって四十四年余の星霜が走馬灯のごとく過ぎた。今右の耳から入り、左の耳に抜ける物忘れが多くなった。半世紀前の思い出の記録を集めて、書いて見た。

昭和十一年、徴兵検査で丙種合格国民兵であった。戦火はますます熾烈になり、戦績は前線で思うようにはか

どらず、苦戦するところも出る。

兵役法は再三改正され、国民兵も召集されることになった。昭和十八年七月二十一日、大阪陸軍病院金岡病院に応召、一回目の身体検査で痔のため不合格、二回目も不合格と言われる。余ほど痔が悪いらしい。係官が採用して欲しい者は申し出よ。歓呼の声に送られ国を出た以上、帰るのは男子の本懐ならずと思い、採用を頼む。軍医は極寒の地へ行くがよいか。やっと合格でき、非常にうれしかった。当日の合格者は全員国民兵だった。

堺市の湯屋小学校で三日ほどおり、朝鮮經由鴨緑江を渡り、嗚呼、中村大尉で名高い興安嶺を越え、沖、横川両雄姿の碑のある土爾地哈の兵站病院に着く。その病院で、一期三か月の衛生兵教育を受けた。国民兵だからといって手心を加える教育はしなかった。上官の命令は絶対服従。軍律非常に厳しかった。

兵站病院は海拉爾に移動する。ここは砂漠地で、冬は寒くその上風が強いので、常に防塵眼鏡を携帯していた。

昭和十九年二月十一日、幹部候補生志願、陸軍衛生部

幹部候補生合格。現役兵の幹部候補生と集合教育を受け、昭和十九年四月一日、陸軍衛生部甲種幹部候補生合格。昭和十九年十一月一日、東京陸軍軍医学校へ入校のため、海拉爾を出発して、途中関釜連絡船は、いつ空襲があるか非常に険悪な状態であった。

十一月一日、東京陸軍軍医学校入校式当日、敵の偵察機らしき一機、東京の上空に飛来せり。そのとき、寮前で生徒の集合した場所に、機関砲の不発弾が落ち破裂し、生徒の足に軽傷を負った。非常に高度が高いので、高射砲の撃つ音すれど撃墜できなかった。

昭和二十年一月になり、昼間B 29は五、六機編隊で飛んで来る。日本の戦闘機一機、B 29に突撃して体当たりをした瞬間、B 29一機は白煙を吹きながら編隊より徐々におくれ、千葉県の沖、海中の藻屑となった。あるときは戦闘機が、B 29に突撃寸前B 29から発射した機関砲で撃たれ、もんどり打ち落下する。こんなとき、早く飛行機から脱出して落下傘で早く、祈るも空しく若人は露と消えた。

B 29の編隊はだんだんと波状的に飛来して、コースは

決まっていた、富士山を利用された。夜間は、百発百中の正確さを誇った高射砲も高度一万メートルでは探照灯でうまく爆撃機を捕らえることができるが、弾の破裂は七メートルくらいらしいということで、どうすることもできないようであった。

また、爆撃機から落とす大きな火の玉が破裂して、数十本の大きなろうそくが燃えながら落下する。やがて銀座、浅草方面は炎に包まれ、空も赤く染め、一瞬にして焼野原と化した。これは親子焼夷弾といって、一つが十五本に分かれる油脂焼夷弾であった。

昭和二十年一月二十七日、東京陸軍軍医学校卒業、陸軍衛生部見習士官となり、同日付で将校勤務となる。昭和二十年二月一日、新京幹部教育隊へ転属のため、東京駅に着いたとき、空襲あり、地下室に退避する。爆弾の破裂する音が地響きして相当長い間聞こえてきた。空襲警報が解除され外に出たが、鉄筋の家は破壊され、東京駅品川間不通となったので、品川駅まで歩く。前途は多難のようであった。新京幹部教育隊から昭和二十年三月一日、第十九野戦貨物廠二六四六部隊に転属、製剤課勤

務となる。

大東亜戦争はますます激しくなり、ソ連が満州へ突入するとうらわさが出たので、七月に第十九野戦貨物廠は海拉爾からたくさんの資材を積み、鄭家屯に移動する。ここにパーシバル中將が収容されていた立派な建物があつた。私はもっぱら漢方薬の収集の任につく。ここには自生の麻黄、ウハウルシ葉、当帰、黄連、甘草等自然に生育した薬草の山を見て、さすが中国は漢方薬の国であると思う。

八月中旬、資材の整理が終わらなかつたが、部隊は移動することになり、再び資材を列車に積載して出発した。途中、第十九野戦貨物廠の移動先は吉林省といっていたが、詳細はわからなかつた。

八月十五日、奉天駅に着く。駅前の立派な建物は爆撃されていて、駅構内には無蓋車に暑い日天で、立錐の余地もないほどで子供を連れた婦人がコウモリ傘をさして立っている。入ってくる列車は奥地からだろうか、集まって来る。どの顔もこの顔も青白く疲労したようである。プラットホームでは昼食の用意をする婦人もいた。

第十九野戦貨物廠二六四六部隊は、関東軍と連絡がつかない。山田関東軍司令長官は、ソ連へ飛行機で連行されたらしい。本日正午、天皇陛下の玉音放送を聞くよう命令がある。天皇陛下のお声はよくわからなかったが、戦争終結の詔勅発布で、日本は無条件降伏となった。

一か月ほど、安東の東洋紡績と日本軽金安東工場であった。国境鴨緑江の橋のところまで行って来たが、橋の両端に警備兵がおらず、自由に通行できるようであり、もう新義州には家ごとに新しい朝鮮の国旗が掲揚されていた。安東の町中で部隊と離れ、帰るところがわからないのか、古い軍服に破れた麦わら帽子をかぶり、ナンバを食べながら暑い町中をさまようているが、我々も今後どのようなことになるのか、待つのは辛いことであった。

いよいよ、旧奉天城に集合する。各地から集まって来た日本兵はたくさんおり、我々は第四十八大隊（一千人）編成され、それから抑留生活が始まった。二か月ぶりにドラム缶の中で入浴する。今度はいつ入浴できるかわからない。旧奉天城を出るとき、背中に重いリュックサックをつけ、奉天駅まで徒歩、途中ソ連兵が要所要所

にたくさん監視をして敵しいようで、満人がソ連兵に射殺され、道路のところで死んでいた。奉天駅に着く。これからソ連へ労働に行かねばならぬ。

無事日本へ帰れることを祈るのみ！

第四十八大隊を積んだ列車は奉天駅を北に向かって発車したが、前の列車がつかえているようで列車は進まない。便所に行こうと思っても、列車の便所はもちろん、線路の両側にも積もっていたから、線路より離れたところへ行こうと思っても、ソ連の監視兵が日本兵の逃亡を警戒し、非常に敵しい。奉天を出て汽車で一か月かかり、満州の北端、黒河の町に着いた。町には電灯はなく真っ暗だった。黒竜江を隔てた対岸のブラゴヴェンチェンスクでは、煌々と明かりが輝いていた。

十一月一日、黒竜江の前は船で渡していたそうだが、我々は鉄舟を横に並べ、その上に板を敷いた橋を渡り、ソ連に入り、初めてその夜露営した。翌朝ブラゴヴェンチェンスクは砂漠地帯の上に建てられた町のように、歩きにくかった。

ブラゴヴェンチェンスクを発車した列車は、翌朝ソベ

リア鉄道本線との分岐点で、太陽は列車の後部から出て
いるというのがつかりする。我々を乗せた列車は、容
赦なく西へ西へと進む。ああ我々の運命はどうなるのだ
ろうかと感じた。

ソ連領に入ってから、ソ連兵は何度も車両の中に入っ
て身体検査したり、リュックサックの中を調べに来て、
よい品物は取られる。

シラーの駅で武装解除され、民間人となる。貨物自動
車の荷台にぎっしりいっぱい乗せられ、四十〜五十里、
四〜五時間かかったろうか、その間に部落は四〜五、ソ
連の広いのに驚いた。おろされたときは夕方で、ここは
非常に雪が深く三メートルぐらいいもあり、おまけに宿舎
まで深い雪の中を歩き宿舎に着いたが、電灯がないの
で、白樺の皮に火をつけ明かりとする。この宿舎はソ連
の囚人が住んでいたところだそうである。

到着したときは軽い黄疸にかかったが、戦友は深い雪
の下にハコベがあったと、取って来ては食べさせてくれ
たので、お蔭で早く治る。

昭和二十年十一月初めころ、アバカン地区第三十三収

容所第七分所に着いたようである。この知名はコム
ナールという。蒙古に近いらしい。山奥で取った砂金を
索道で運んできては精錬している。

ソ連では遺骨は残さないといって、私の持って来た中
隊長の遺骨等全部集めてペーチカで焼いた。ああ無残！
作業は伐採、穴掘り、除雪作業等々である。日本の将
校は兵隊三十〜五十人ぐらいの引率者となり、それに一
人のソ連監視兵がつく。冬季零下三十度以下になれば作
業は休みで、伐採する木はほとんど落葉松で、二抱えも
三抱えもあるような大木であった。伐採は二人一組で、
一日のノルマは一人一立方メートルすれば一〇〇％で、
それによって食事の量が決まる。

初めのうちは一〇〇％達成することができたが、労働
が厳しいので、日々に身体が弱り、三〇〜四〇％くらい
しかできなくなった。その上、だんだんと食べ物も悪く
少なくなり、時には一〇〜二〇％に落ち込むこともあつ
た。お腹がすいて逃げる機敏さがいいのか、材木の下敷
きになり大怪我をする者も出た。

ソ連では、「働かざる者は食うべからず」主義である。

日本人は食って働くのだといつても、全然わかってくれない。今日食べるものが少なくて、翌朝必ず収容所の前に連れに車はやって来る。

冬の山はどこを見ても食べられそうなものはない。昔東北が飢饉のとき、松の皮の白い甘肌をうどんといつて食べたというのを思い出して、落葉松の甘肌を食べて飢をしのぐ。時には伐採に行ったとき、夕刻の予定時間を過ぎて車は迎えに来ない。日は落ち、夜は更けていく。腹が減る。寒さはつる。車は故障したから歩いて帰れとの命令。八キロの道を気をまぎらわすため、軍歌を大きな声で歌いながら歩くと、宿舎へ着く時は、腹が減って声も出なかった。そんなとき、夕食のパン等一口、どの顔もこの顔も不足そうな顔をしている。だから、この山を越せば蒙古だ、逃亡しよう。考えても、この寒さでは凍死の道しかなかった。

時には伐採から帰り、貨物自動車に日本兵を乗せ過ぎ側板が壊われ、疲れと重い防寒衣のため、お互いがつかまる力がなくなり、荷台から落ち怪我をする者もあった。

煙草等は、物々交換をする。ダバイ(交換)する品物がなくなると、煙草を吸うことができなくなると、ニコチン中毒は我慢できないので、柴を煙草の代用に吸ったが、喉はヒリヒリと焼けるように痛かった。スピーチカ(燐寸)がないので、綿で火縄をつくり、火打石で火を起こし、原始的な生活であった。

除雪作業は山奥まで砂金を取りに行く道路の雪おろしをして、その通りやすいようにする。道端ではソ連の小さな子供に会うと、ヤボンスキーミカド、足で蹴り上げたり、両手の親指の爪でシラミつぶしをして、ソ連は強いぞといっている。敗戦は哀れであった。

しかし一般人の監督で、蒙古人は身体の皮膚の色、顔の形や目の色は日本人によくにて人種に相通ずるところがあるのか、マホルカ(煙草)をくれたり親切な人もいた。

昭和二十一年四月、春が訪れ、雪解けが始まると、川が氾濫して輸送ができないから飯米が届かないという。普段のかゆをさらに延ばす。中を見れば、米粒は数えるほどしかない。日に日に栄養失調で倒れる者、死亡する

者もふえ、一日に三人も死亡したときは、山で掘り難いから一つの穴に三人一度に埋葬して、その上に三本の墓柱をたてたといっていた。

雪解けが終わると、野山に大根、人參、紫蘇、牛蒡、わけぎ等この辺一帯は野菜の宝庫だ。片っ端から取って食べ、今までの飢えを耐え忍ぶことができた。七月になったのに近くの高い山には残雪があり、年中雪が解けない所である。

七月の初めにいよいよ移動することになり、前に車で来た道を歩けという。ソ連は日本人をみな栄養失調で殺す積もりであろうか、ユムナールを出発して、その晩は野宿をした。真夏であるのに夜間は寒いので、草の上に固くなった牛の糞を集め、焚火の代用として暖を取る。

ソ連では夜の九時ごろ日没、午前三時ごろ日の出、ゆっくり夜寝の間はない。昼間は暑いので、朝早くシラーの駅に向かって出発した。靴ずれで足が痛く、背中のリュックは肩に食い込んでくる。棒のようになった引きつる足を引きずりながらシラーの町に着き、シラーの駅からまた西に向かって列車は走る。まだ働かねばなら

ないのか、アバカンに着いた。

「アバカン」は北極海に注ぐソ連の大河オビ川、エニセイ河の源流に近い大平原にある。この收容所は大きく、日本兵が二千くらいおって、同年兵は石炭掘りをしてきた。私たちはここでドイツから分捕って来たという石炭液化機のたくさん機材を整理する。ここで一番最初に驚いたことは、真夏に曇ったかと思うと、雹が降って来て、地に落ちた氷塊は四、五センチもあった。子供の頭に当たると死ぬ者もいるということである。捕虜のドイツ兵に会ったが、日本兵よりも痩せて痛々しかった。

日本兵は一年間に一割の捕虜が栄養失調で亡くなったそうである。日本は昭和十六年、関東軍大演習の名目で、満州に百万人を動員してソ連の決戦に備えたということで、百万人の捕虜を集めるのに苦労したようである。

アバカンでは入浴は月に一回くらい、町の入浴場へ行く。洗面器一杯の湯で洗った後で、蒸気の部屋に入るのであるが、大勢で暖まる暇もない。帰りに外は厳寒で、ぶら下げた手拭いはたちまち凍る。スープの中には人間

の食べられるような肉片はなく、牛の肺臓が多かった。

作業として、時にはコルホーズから貨物列車に積んできたカルトシカ（馬鈴薯）を倉庫に入れる作業である。このときは少し持って帰れるのが魅力であった。

建設現場では、徴用されてきた若い女性はみすぼらしい服装をして、ターチカ（一輪車）でれんがや資材を高いところに運んだり、梯子の上段に乗って資材をリレー式に屋上に上げる作業をする時、パンツを履いていないと聞いたので、上にいる彼女の下からのぞいたが、スカートの中は暗いのはつきり見えなかったが、楽しかったぞ。

アバカンで一番寒いとき、零下六十度で当然作業は休みだが、外に出ると、汽車でトンネルの中に入ったときのように耳がツーンと鳴る。空はどんより曇り、気持ちが悪かった。そのようなとき、小便是宿舍の出入り口に用足し、暖かい日に鶴嘴で掘り捨てる。大便是高さ三、四メートル横五メートルくらいに数枚の板を渡した青空便所で、夜間は危険であるから、宿舍より離れた便所へ行ったが、暗く穴がわからないので、お尻は山のように凍り積もった大便にふれると、幽霊に触られるように冷

たかった。

ある日、パンの原料小麦粉受領を依頼され、日本人、私と外一人とソ連兵一人と貨車自動車で行く。この道路は軍用道路のようで、よく整備されていた。途中フェリーボートがあった。この川は北極海に注ぐオビ河か、エニセイ川かわからないが、大体どちらも河口から二千キロぐらいの所、北海道の北端稚内から南端鹿兒島までの長い距離がすっぽり入ってしまう上流でも、川幅二百メートルぐらい、水は豊富で流れは早い。貨物自動車六、七台積めるフェリーボートである。川の両岸にワイヤロープを張り、それを頼りに水に流されないよう向こう岸に渡り、対岸で満載になると、こっちに引き返す。ちょうど船が向う側に行っていたときであったので、長時間待つ。ある町に着いたのは午後三時半ごろである。

ソ連兵はここで帰って来るまで待っておれと、どこかに消えた。町はずれで家の前に真つ赤な姫林檎が一個成り、その周囲の畠にはトマトがたくさん成っている。夕暮れになっても迎えに来ないので、家の前にあったアンペラで夜を明かす。昨夜来食べていないのでトマトを盗ん

で食事とした。翌日昼食も食わずに、午後三時、収容所に帰る。一同、無事帰ったのを非常に喜んでくれた。

昭和二十二年四月初め、日本へ帰れるということではバカンで汽車に乗る。列車は初めて東に走る。今度は本当らしいと思っていたのに、クラスノヤルスクの駅に着いたとき、将校は、働いていないからラポート（働け）、また下車せよという。立派な町だと思っていたが、駅前には汚かった。

昭和二十二年四月八日、クラスノヤルスク地区第三十四収容所第三分所、ここで三度目の収容所生活をする。ここは将校ばかりの収容所で、毎日穴掘り作業ばかりさせられた。私は痔が悪いので今年の冬までに日本に帰りたいなと思った。

昭和二十三年十月八日、今度こそ帰してやるということで、クラスノヤルスクでシベリア鉄道に乗ると、列車は東へ東へと進む。窓を開けるなどしているが、外の眺めはもう晩秋で、二メートルぐらい延びた草はほとんど枯れ、一望千里、果てしなき草原地帯で、ソ連の大平原に驚く。草原地帯にたくさんの糞尿を投棄していた。

どの駅もモダンである。鉄道は日本では線路を延ばして駅をつくるが、ソ連では昔から駅と娯楽をつくって線路を延ばすといわれている。

列車は東に向かって進む。昔からロシアの汽車の時間は正確でないと聞いていたが、ナホトカまで半月もかかった。船が岸壁を離れるまで、いつ仕事に残されるかわからないというので心配していたが、十月二十四日、ナホトカの港を離れる。

十月二十八日、日本の島が見える。船の汽笛は鳴る！舞鶴の港に近づく、心は躍る。栈橋は見える。船は栈橋に横づけにされた。長いソ連の旅と船の旅で疲れていたが、うれしさいっぱいタラップを一步一步と踏みしめながら栈橋に下りた。日本の香りがする。栈橋には何人か我が子の帰りを待っているであろうか。舞鶴援護局に入ったが、もう心は我が家に飛んでいた。

昭和二十二年十月三十一日、夕刻やっと紀伊内原駅に着いたとき、うれしさ胸に迫り、感慨無量であった。迎えに来た兄と家路に急ぐ。

諸君も各地の戦線で、また終戦後捕虜として並々なら

ぬご苦勞をされ、生死をさまよわれたことでしょう。私も一人前に苦勞して帰って来たと思うので、一筆書かせていただきました。

皆様のご健康をお祈り申し上げます。

欧州ロシア抑留記

和歌山県 那須 淳 男

まえがき

シベリア抑留記を書いていただけませんかと要請されて、はっとした。抑留生活を終えて帰還した当時から、抑留の記録でも書いておのれの体験を残して置きたいと思いつつ、書き始める機会がなく、そのうちそのうちと思ううちに月日は容赦なく流れて行く。遂に記憶すらだんだんと薄らいでいく。なおさらに書き出す機会を捉えることができず、なんと丸三十二年の月日が流れた今日、文才もなければ浅学非才の身、人様に見ていただくようなシベリア抑留記なんて到底書けるものではありません。

せん。しかし三栖遺族会が会史発行のため、ぜひ支援を要請されるままに、断ることもできず、最初からおのれの考えていた記録だけでも書いてみてからにいたしましよと返答を申し上げ、昭和五十五年正月三日間、夜を日につき、当時を回想しつつ、走り書きで書き終わりました。我ながら感心したくらい、当時の苦しかった日々の連続は脳裏に焼きついてあるのか、案外次々と日記でもたどるごとく書き綴ることができました。

しかしまだ後で、あれもこれとも思い出すこともありますし、要所要所を書き綴りましたので、物足りない点多々あるうかと思われますが、ご容赦願います。

昭和二十年八月五日付、関東軍野戦自動車廠通化（関東軍最後の陣地として重要拠点）支廠副官を拝命、八月八日午後十一時五十分、新京駅発列車にて赴任のため出発、翌九日午前四時半、四平街駅に到着するや、空襲警報発令、乗客全員附近に疎開、警報解除とともに列車は通化に向かい出発。そばの乗客のひそひそ話によれば、いよいよソ連軍が不可侵条約を破棄し、ソ満国境より進